

4月21日 高校イースター礼拝『彼女の物語』

聖書

〈コリントの信徒への手紙一 15章 3～8節〉

最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしろ、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

〈マルコによる福音書 16章 1～8節〉

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」

婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

メッセージ（広島大学 辻学先生）

今日は女学院のイースター礼拝ということですが、イースターとか復活祭と言っても、少し前までは、何のお祭りなのか、日本では知らない人が大半でした。ところが近頃は、世間の様子も変わってきました。今年のイースターは、正式には4月1日でしたが、3月の半ば頃から、町のスーパーマーケットや輸入食品のお店などに行くと、イースター用のお菓子がいっぱい売られていました。

関西で大学生をしている娘（彼女も女学院の卒業生です）に教えてもらったのですが、最近ではディズニーランドでもUSJ（関西では「ユニバ」と呼ぶのですが）でもイースターをやっています。ウェブサイトを見ると、なるほど、イースターのパレードや催しを、3月初めからなんと6月までやっています。

ディズニーやユニバのイースターを（インターネットだけですが）見た感じでは、それは「春のお祭り」です。春がやって来たことを喜ぶというのがメインテーマに見える。これ自体は間違っていないわけで、もともとヨーロッパでも、イースターは春が来たことを喜ぶお祭りとして祝われてきたわけです。暗くて長い冬が終わり（ヨーロッパの冬は本当にそうですから）、明るくて暖かい春がついにやって来た。その喜びの表現なわけです。「イースター」という英語の名前も、ゲルマン神話に遡る4月（＝春）の女神（エオストレ）から来ていると言われています。

このように、イースターというのは基本的に春のお祭り、すなわち新しい命が生まれてくることを喜ぶお祝い

の時、という性格を持っています。キリスト教的に言うと、イエス・キリストが復活し、新しい命をもたらしたことを喜ぶという言い方になるでしょう。

実際、イエスの復活を伝える聖書の一番古いメッセージもそんな感じですが、パウロが第一コリント書の 15 章に書いているのがそれです。「最も大切なこととして私があなたがたに伝えたのは、私も受けたものです。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおりの私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてある通り 3 日目に復活したこと、ケファ（ペトロ）に現れ、その後 12 人に現れたことです。次いで、500 人以上もの兄弟たちに同時に現れました…」(15:3-5)。このリストは、イースターの出来事を伝えるいわば「公式記録」なのですが、復活を誰が見たのかということが、淡々と書かれています。

しかし、マルコ福音書 16 章の話の方はちょっと違います。3 人の女性が、イエスの遺体に香油を塗るため、墓へと向かいます。この女性たち、どういう表情をしていたでしょう？ きっと悲しい顔で、涙さえ流していたのではないかと僕は思います。自分にとって大事な人が亡くなった、しかも十字架刑なんていうむごい刑罰で、身体は鞭で打たれ、釘を刺され、ボロボロだったはずですが、そんな姿、見るのも辛かったです。

しかし墓へ行ってみると、イエスの遺体はなく、そこには若者（天使）が座っていて、イエスは甦ってここにはいないと言う。ガリラヤへ先に行っているから、そのことをペトロたちに伝えろと命じる。

しかし 3 人の女性は、墓を出て逃げ去り、「誰にも何も言わなかった」と書かれています。僕が引っ掛かるのはここです。「誰にも何も言わなかった」というのが本当なら、どうしてこの物語は伝わったのでしょうか。

実際、この点に引っ掛かった人はすでに早くからいたわけです。これはマルコ福音書の話ですが、マタイ福音書とルカ福音書では、この女性たちはペトロさんたちに伝えに行ったことになっています。が、マタイ福音書とルカ福音書というのは、マルコ福音書を下敷きに書き直したものですから、つまりマタイさんとルカさんは、マルコさんの話ではつじつまが合わないと思って、3 人の女性が黙り込んだという点を書き改めたことになる。

しかし、そもそもなぜマルコさんは、この 3 人が誰にも何も言わなかったことにしたのでしょうか。本当に誰にも何も言わなかったら、ペトロさんたちに伝わらなかったはずですから。

実は、そこがこの話の一番大事なところではないかと僕は思うわけです。つまり、この話は伝わらなかった。この話が事実なら、最初にイエスの復活を知ったのは、この 3 人のはずですが、ただ先ほどのパウロの言葉には、彼女たちのことは何も出てきませんでした。復活したイエスは、ペトロと弟子たちにまず現れたことになっています。もちろん彼女たちは、イエスを見てはいません。ただ復活のメッセージを最初に聞いたのは、紛れもなくこの女性たちだったわけです。それが全く無視されている。

無視されているのはその出来事だけではありません。この女性たちもそうです。この 3 人、すなわちマグダラのマリア、ヤコブの母マリア（おそらくこれはイエスのお母さんです。ヤコブというのはイエスの弟ですから）、そしてサロメという 3 人の女性が、その後どうなったかは、まるで伝わっていないのです。最初にエルサレムで出来た教会に、イエスのお母さんがいたらしいことはわかっています。しかし、マグダラのマリアとサロメはどこへ消えたのでしょうか？ その足取りは綺麗さっぱりなくなっています。つまり、歴史の陰へと消えてしまったわけです。つまりこの物語は、登場人物も出来事も皆に知られることなく伝えられなかった「陰の物語」なわけです。でも、そこにこの物語の意味がある。

第一コリント 15 章の、復活したイエスを見た人リストの方ですが、そこに名前があるのは男の人ばかりだということに気づいたでしょうか？ ペトロ、12 人、500 人以上もの兄弟たち（中にはもしかしたら女性も含まれ

ているかもしれませんが)。このリストはこの後、イエスの弟ヤコブ、すべての使徒（＝弟子）、そしてパウロと続きます。要するに、出てくるのは男ばかり。これが、イエス復活すなわちイースターの「正式な歴史記録」なのです。

英語で「歴史」を history と言いますが、history は his story すなわち「彼の物語」だと言われることがあります。つまり歴史とは、客観的な出来事を並べているわけではなく、「彼の物語」＝男が描き、男が描かれる、男の物語だというわけです。これは、フェミニズムの中から出て来た指摘で、そこには her story、すなわち「彼女の物語」が欠け落ちているというのです。

history という単語は、ギリシャ語の historia という、「調査、情報、調べた内容」を意味する単語から来ているので、his story というのは、語源の説明としては間違っています。しかし、歴史はたいてい his story だという指摘自体は当たっています。日本史や世界史の教科書が描く「歴史」は、王や皇帝、政治家や指導者、軍隊を率いた、いわば出来事の「表舞台」に立っている人たちの物語で満ちている。そしてその人たちはたいてい男です。それは、キリスト教とて例外ではありません。イエス・キリストの復活という、キリスト教の出発点とも言うべき出来事を伝える歴史の主人公は男ばかりなのですから。

それに対して、マルコ福音書の短い物語は、まさしく「彼女の物語」です。3人いるから「彼女たちの物語」と言うべきかもしれませんが、この「彼女の物語」には、悲しくて寂しい雰囲気が漂っていると思いませんか。復活を見たという男たちのリストの、どことなく自慢気な様子とは対照的に、イエスの復活を知って嬉しいという様子は全く感じられません。彼女たちは、天使から復活のことを聞いても、喜ぶどころか、「震え上がり、正気を失っていた。そして誰にも何も言わなかった。恐ろしかったからである」。こうして、彼女たちが聞いたことも、そして彼女たち自身もまた、歴史＝history の陰に消えていってしまった。その消えていった物語、her story を拾い上げて、マルコさんがここに書かなかつたら、この物語は永遠に失われたことでしょう。

イースターは、春のお祭り、新しい命が生まれることのお祝いだというので、明るいムードでお祝いされています。日本でもこれからきっとそういう感じで流行っていくことでしょう。しかし、その history の陰にある「彼女の物語」は見落とされています。イースターだ、復活だ、新しい命のお祭りだと喜ぶ声の陰で、イエスが残酷な仕方で殺されたことをまだ受け入れられず、悲しみの中から抜け出せない女性たちの声小さく響いている。

それは、人間の歴史のほとんどのに言えることで、his story の陰には her story がある。しかし僕たちは his story だけに目を向けていて、陰にある「彼女の物語」に気づかない。戦争の勝利者の陰には負けた者があり、家を焼かれ、命を落とし、心も体も傷つくたくさんの、歴史には残らない人間がいる。経済的な成功や繁栄を喜ぶ人たちの陰には必ず貧しい、今日の食べ物さえ手に入れない人間がいる（ものすごいお金持ちがいる国には必ず、ものすごく貧しい人たちもいる、とはよく言われるところです）。でも僕たちはどれだけ、歴史の陰に隠れている「彼女の物語」に目を向けているでしょうか。

広島女学院という学校は、明治期の、男中心の社会の陰にいた女性たちに光を当てようとして建てられた学校です。男たちが作る his story の陰にいた女性たちが、その陰から出てきて、her story が his story と同じように評価される、そういう社会を作る、それが女学院の目指したところだと思うわけです。そしてその使命＝女学院のミッションは今も変わらない。

この世界は、his story の陰にある数え切れないほどの her story で充ち満ちています。ぜひ女学院の皆さんが世界に出て行って、その her story に光を当て、歴史の陰に隠れている人たちの悲しみや苦しみ、その声に応える

仕事をしてほしいと思います。それが、女学院の目指す本当の「スーパー・グローバル」ということなのではないでしょうか。

広島という街は、戦争、そして原爆という歴史の陰にある人々の悲しみや苦しみ、世界史の教科書が描かない「彼女の物語」を語り伝え、広める働きを続けてきました。広島の街はまさしく復活し、綺麗になりました。が、決して忘れられてはいけない物語が、悲しむ人や苦しむ人の物語が、たくさん広島にはある。その物語を受け継ぎ、語ることの大切さを、復活の陰にある、3人の女性のエピソードは訴えているように思えます。